

奄美における兼久式土器の基礎的研究（3）

～揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付けを中心に～

鼎 丈太郎

はじめに

平成22年、兼久式土器を大量に出土した小湊フワガネク遺跡群が国指定史跡に指定された。兼久式土器は、奄美群島特有の在地土器であり、ヤコウガイ大量出土遺跡において出土している土器も大半が兼久式土器である。当該時期の奄美群島は、ヤコウガイの大量集積、貝匙製作、鉄器の使用、ヤコウガイ交易や階層社会の出現の可能性など、奄美群島の古代史を大きく塗り替えうる可能性を持っている。しかし、これらの遺跡が全国的に注目を浴びている一面、兼久式土器は未だ不明な点が多い。

揚殿遺跡から出土したくびれ平底土器も、兼久式土器もしくはこの系譜に帰する資料であると考えられる。しかし、小湊フワガネク遺跡群やマツノト遺跡で出土した兼久式土器とは、相違する点があり、今までの兼久式土器研究において、その位置付けを決めるには困難な資料である。また、当該資料は、沖縄のアカジャンガー式・フェンサ下層式土器との類似点も少なくない。

そこで、兼久式土器の研究状況を確認した上で、沖縄の研究状況とも比較しながら揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付けを検討したい。

1 兼久式土器の定義

河口貞徳氏が、奄美群島出土土器の編年を行う際、伊仙町面縄第三貝塚（当時兼久貝塚）から発見された出土土器を標識として「兼久式土器」と名付け、設定したのが兼久式土器の始まりである。

河口氏は、沖縄県出土の類似土器との比較から、兼久式土器の特徴として「平底の底部に木葉圧痕があり、頸部に絡縄凸帯をめぐらせる（縦位方向の凸帯あり）。沈線文は鋸歯文を基本とし、直線的である。口唇部に刻目を施す。単独遺跡を形成する。石斧を伴わない。」ことを示している（河口1974）。この河口氏の論文で初めて兼久式土器の名称が示され、その特徴や年代がおおまかに定義付けられた。この名称は、今まで使用されている。

河口氏が定義付けを行った後、発掘調査において、河口氏が設定した兼久式土器の定義に合致しない新資料が相次いで発見されたが、これら新資料の取扱いは、研究者により様々である。

2 兼久式土器の研究略史

兼久式土器は、奄美群島に広く分布している土器である。砂丘遺跡から出土しており、器形は甕形土器と壺形土器で構成され、大半が甕形土器である。底部に木葉圧痕を有する事が一番の特徴だが、未だに判然としない部分が多い土器である。そこで、ここでは兼久式土器の先行研究を整理してみたい。

1930年、広瀬祐良氏・小原一夫氏が徳之島の伊仙町にある面縄第一貝塚を調査した際に、発見したのが兼久式土器の初見であるが（中山1994）、兼久式土器の名称自体は、前述した通り、1974年

に河口貞徳氏が奄美諸島の土器の型式設定を行う際、伊仙町面縄第三貝塚（当時兼久貝塚）から発見された出土土器を「兼久式土器」と名付けたのが始まりである。「石斧を伴わないこと」、「弥生式土器の終末期の笹貫遺跡の土器の影響で底部に木葉圧痕をもつこと」から、兼久式土器の年代を弥生時代後期と推定している（河口 1974）。この論文で初めて兼久式土器との名称が示され、兼久式土器の特徴や年代がおおまかながら設定された。

その後、喜瀬・サウチ遺跡（河口 1978）、面縄第1・第2貝塚（牛ノ浜・堂込 1983）、須野・コビロ遺跡（熊本大学〈内山〉 1983）、辺留・ベルクボ遺跡（熊本大学〈松原〉 1983）、須野・アヤマル第2貝塚（池畠 1984）、和野・長浜金久遺跡（弥栄 1984・1987・1995）、万屋・泉川遺跡（立神 1986）、先山遺跡（戸崎・長野 1987）など多くの発掘調査が実施され、壺形土器が存在することや、開元通宝と共に伴することが確認された。また、成川式土器の影響や兼久式土器の中にスセン当式土器が含まれている可能性がある点が指摘された。

年代については、弥生時代後期頃から平安時代と「かなり息の長い土器である」という意見や、古墳時代から平安時代という意見など研究者により様々であった。また、兼久式土器とアカジャンガー式・フェンサ下層式土器との関係や南九州の弥生式土器との比較検討の必要性も多くの研究者が指摘している。

なお、兼久式土器を用いた時期の遺跡は、出土地点の大半が砂丘地であり、単一層の小規模遺跡を形成し、定住しなかったと推測されていた。

1991年、笠利町教育委員会が実施した土盛・マツノト遺跡の発掘調査では、それまでの兼久式土器を出土する遺跡と比較すると画期的な成果があった。

「兼久式土器などの出土遺物が今までの遺跡とは比較にならないほど大量に出土した」、「白砂層を挟み上下二層の文化層（兼久式土器主体）が存在する」、「共伴遺物が量・種類ともに多く、出土した共伴遺物を羅列すると、土師器・須恵器・水引き椀・鉄製品・銅製品・ガラス製管玉・雁股状の鉄鏃・貝製品・貝小玉・土製品・フイゴの羽口・鼎型土器など今までの兼久式土器を出土する遺跡では見られなかった共伴遺物が多数出土」（中山 1992b）。

特に注目すべき成果として、兼久式土器が上下二層に分かれて出土している点があげられる。この成果から、兼久式土器研究で初めて層位学的研究が行えるようになった。中山氏は、土盛・マツノト遺跡の文化層について出土遺物などから時代を設定し、上層の文化層を7~8世紀代、下層の文化層を弥生時代後期としている（中山 1995b）。また、土盛・マツノト遺跡の成果を基にシンポジウムも開催されている。

土盛・マツノト遺跡シンポジウムの後、笠利町教育委員会と熊本大学文学部考古学研究室は、用・ミサキ遺跡をたびたび発掘調査しており、大量の兼久式土器や注目される共伴遺物が確認されている（笠利町教育委員会 1995b、熊本大学文学部考古学研究室 1995・1996・1997）。笠利町教育委員会と熊本大学は、兼久式土器の文様を主体として、分類を実施している。

用・ミサキ遺跡での注目される点は、兼久式土器に先行する土器としてXVI層出土の土器がある。この土器について、高梨氏は沖永良部のスセン当式土器の可能性を指摘している（高梨 1999a）。また、共伴遺物として、貝札（広田上層式）が兼久式土器と共に伴することが初めて確認されたことがあげられる。貝札は、多くの研究者が兼久式土器編年の指標としており、この発見がいかに重要であるかが理解できる。そして、兼久式土器と開元通宝との共伴も注目される。開元通宝との共伴関

係は、面縄第一貝塚でも共伴の可能性が指摘されている。

1997年、名瀬市教育委員会により発掘調査が実施された小湊フワガネク遺跡群は、遺構・遺物とともに重要な成果をあげた。1999年には、シンポジウムも開催されている。

「遺跡の規模が広大であり、出土遺物の数量が膨大である」、「出土遺物の種類が豊富である（兼久式土器・隆帶文を二条廻らせる土器・土師器・土師器模倣土器・滑石・滑石混入土器・カムイヤキ・白磁・青磁・貝札・貝匙・貝匙未製品・ヤコウガイ有孔製品・鉄製品・割り取りされたヤコウガイ・接合するヤコウガイ破片・石器）など」、「良好な遺構（堀立柱建物跡・貝匙制作跡・ヤコウガイ大量集積・ヤコウガイ貝殻破片集積）が検出された」、「一次調査と二次調査で時間差がある」、「二次調査の一部で包含層の疊重が確認された」、「文化層が三層（①白磁・類須恵器・滑石製石鍋等出土層、②兼久式土器出土層、③弥生土器出土層）確認されている」（高梨 1999b）。

小湊フワガネク遺跡群における成果を整理してみると、兼久式土器を出土する遺跡の認識を塗り替える画期的な成果をあげた遺跡であることが確認できる。土盛・マツノト遺跡、用・ミサキ遺跡などと共に重要な遺跡である。

土盛・マツノト遺跡、用・ミサキ遺跡、小湊フワガネク遺跡群の発掘調査や報告書において、多くの成果があり、これまでの「単一層の小規模遺跡を形成し、定住しなかった」と考えられていた兼久式土器出土遺跡が、大規模遺跡の確認やヤコウガイの大量集積などから、交易や階層社会の出現の可能性などが推測されるようになった。

兼久式土器研究も資料数の増大により飛躍的に進み、中山清美氏、高梨修氏を中心に多くの研究者が、分類・編年研究を行っている。各研究者により分類や年代は相違するが、多くの研究者が文様を中心として分類を実施しており、文様の簡素化という認識は共通している。また、「弥生時代の沈線文土器」が「兼久式土器の沈線文のみの土器」へ移行するというこれまでの見解に対し、兼久式土器に先行する土器群「スセン当式土器」の存在が指摘されるようになり、従来の「弥生時代後期から平安時代」という時代認識に対し、「6世紀から10世紀」という新しい時代に使用された土器であることが指摘された。なお、沖縄・貝塚時代後期の尖底土器からいわゆるくびれ平底へ変化する時期についても兼久式土器の研究が手がかりになる可能性も指摘されている。

2005年、笠利町教育委員会が安良川遺跡の発掘調査を実施している。兼久式土器を中心に、オオツタノハ貝製品、無文貝符、貝小玉、円盤状有孔貝製品、釣り針、磨り石、たたき石、クガニ石などが出土している（中山 2005）。

2008年、名島弥生氏・安斎英介氏・宮城弘樹氏が、南西諸島で実施された放射性炭素年代測定による年代資料の集成を行っている。縄文時代からグスク時代並行期の資料が対象で、数量は奄美群島68点、沖縄諸島266点、先島諸島75点である。兼久式土器出土層は、古墳～奈良・平安並行期で取り上げられ、新古の2グループ（古段階、4～8世紀頃。新段階、8～11世紀頃）に別けられている。兼久式土器の研究状況（6世紀後半～11世紀前半）の年代観よりやや古い年代を含むが、概ね合致しているとされ、沖縄のアカジヤンガ一式（4～8世紀頃）・フェンサ下層式（8～11世紀頃）の年代とも一致することから、当該時期の奄美群島と沖縄諸島において対比できる可能性を指摘している（名島・安斎・宮城 2008）。

2010年、伊仙町教育委員会が川嶺辻遺跡の発掘調査を実施、報告を行っている。川嶺辻遺跡では、土器集中区及び土器廃棄土坑より木葉痕を有する土器が確認されている。しかし、これらの土器は、

前6	縄文時代晩期										
前5											弥生模倣土器の段階
前4											
前3											
前2											の台付甕形土器
前1											
1											兼久式土器の段階
2											
3											類須恵器の段階
4											
5											
6											
7											
8											
9											
10											
11											
12											
13	鎌倉時代										

図1 奄美諸島における在地土器変遷図 (高梨 2004)

1,2 : 手広遺跡第5層 3~6 : サウチ遺跡 7 : 長浜金久第III遺跡 8~11 : 長浜金久第IV遺跡
 12~14 : 長浜金久第III遺跡第1地点 15,16 : 小湊フワガネク遺跡群 17,18 : スセン當貝塚 19,20 : 長浜金久遺跡
 21~25 : 用見崎遺跡 26~33 : 長浜金久遺跡 34~46 : 小湊フワガネク遺跡群

刺突文により文様を表現している土器やイボ状の突起が貼付されている土器など、今までの兼久式土器の範疇とは相違する土器群である。また、川嶺辻遺跡では、放射性炭素年代測定により 10世紀前後のデータが得られている（新里・宮城 2010）。

2010 年、筆者は小湊フワガネク遺跡群を中心にまとめた兼久式土器分類（鼎 2001）を基に、川嶺辻遺跡など最新の兼久式土器研究の成果を取り入れ、兼久式土器の再分類を行った。

兼久式土器の分類は、文様（沈線文・隆帶文・刻目隆帶文）と文様帶（施文位置）を重視した研究が主であることは前述した通りである。特に刻目隆帶文に重点をおいた分析が多く、その変化の方向性は、簡素化という方向性が示されている。そこで、兼久式土器の文様分類を文様帶（施文位置）に重点を置き、7 類に再整理を行った。壺形土器に関しても、同様の分類がある程度使用可能であると考えている（鼎 2010）。

なお、川嶺辻遺跡で出土した細い刺突文で施文を行う土器は、従来の分類では兼久式土器の古段階「沈線文のみの土器」に分類されてしまうが、これは文様の簡素化による隆帶文の消滅（刻目文を残す）という変化の方向性であると推測される。この土器に類似する資料は、徳之島や沖永良部島で確認できるが、沖縄のアカジャンガー式やフェンサ下層式との関連も考えられ、今後の検討課題である。

以上、兼久式土器研究及び報告を羅列してみた。2000 年までの研究状況と比較すると 2005 年以降に重要な研究及び報告がなされていることが確認できる。分類研究も格段に進歩しており、文様分析・分類のみでなく、器形分析・分類、属性分析・分類も検討されている。また、研究者により見解は相違しているとはいえ、兼久式土器の編年研究も次々と行われ、徐々に兼久式土器の実体が明らかになりつつあることが確認できた。

3 アカジャンガー式・フェンサ下層式の定義

前述した通り、兼久式土器と同時期の沖縄諸島の土器は、アカジャンガー式・フェンサ下層式土器が相当すると考えられている。沖縄諸島の土器研究は、高宮廣衛氏を中心に編年研究が進められているが、伊藤慎二氏が高宮氏の編年表に示されている各細別型式についてまとめているので、引用したい（伊藤 2000）。

（アカジャンガー式）

①標識遺跡 沖縄本島具志川市アカジャンガー貝塚

②概要 くびれた平底をもち、口縁部のみ外反する深鉢形器形である。口縁部に文様を施したものも多い。具志原式の文様と、ほとんど変わることろが無い。壺形土器を伴う。後述するフェンサ下層式とともに、最大の指標がくびれた平底にあり、両者を明確に区分することが困難である。そのため、事実上保留されている型式概念である。ただし、くびれた平底を特徴とする土器群を後期後半に位置づけることでは、大方の見解が一致している。奄美諸島の兼久式は、これらの土器群と明確に一線を画して区別することが困難である。

（フェンサ下層式）

①標識遺跡 沖縄本島糸満市フェンサ城貝塚

②概要 くびれた平底をもち、口縁部が微弱に外反した深鉢形器形である。無文化の進行が著しいことが特徴的とされる。口縁部付近に瘤状の突起を貼付したものがある。壺形土器を伴う。

アカジャンガー式・フェンサ下層式土器の概要を見てみると、兼久式土器と明確に一線を区別することが困難であることが確認できる。なお、伊藤氏はくびれ平底を特徴とする土器文化を「くびれ平底系土器様式」として総括している（伊藤 2000）。

4 アカジャンガー式・フェンサ下層式の研究状況

アカジャンガー式・フェンサ下層式の研究状況は、川嶺辻遺跡の考察で宮城弘樹氏がまとめているので、概要を引用したい（宮城 2010）。

（アカジャンガー式土器）

- ①尖底土器群：平底土器群の割合が5：5程度出土し、文様施文例は1～2割程度となる遺跡、
②平底土器のみの単純遺跡を形成する遺跡、③平底土器群とともに後続すると考えられるグスク土器群との出上例が見られる遺跡がある。
- 大当原式土器と比較し、胎土は酷似するが、器面調整は大当原式が内外面に指頭を残すのに対して、アカジャンガー式ではナデ調整が器面を覆いほとんどの内面に刷毛目調整が残る。
- 文様は、刻目突帯文、沈線による曲線文・直線文、口唇部刻目を施すが、口縁部破片に占める文様施文例の占有率は高くない。また、文様を施す部位は口唇部と口頸部及び胴部であり、兼久式とほぼ同じ。
- 供伴遺物である開元通宝や貝札（上層タイプ）から、6～7世紀頃の年代観を想定。
- 沈線や刺突文を多用する古段階→刻目突帯文の区画が特徴的となる段階の2段階の区分が想定される。
- 器形は、総じて胴上半に張りがあって、頸部で外側に強く外反させる傾向が見られ、次第に胴の張り、口縁部の外反の度合いが減る。
- 底部は、アカジャンガー式土器の古段階には、尖底が伴うことが見られるが、基本的にはくびれ平底土器で構成される（例外として、喜如嘉貝塚、米須貝塚、真栄里貝塚などで伴うミニチュア土器は尖底器形）。
- 底径は、比較的広い。

（フェンサ下層式土器）

- 文様はほとんど無いが、施文例として①突帯文、②ツノ状突起、③肥厚目縁、④瘤状突起の4種に加え僅かに⑤沈線文を施すものがある。
- 突帯文を多出する遺跡と、肥厚口縁とツノ状突起を伴う遺跡がある。なお、肥厚口縁とツノ状突起は属性共伴例があるため共時性が認められる。
後続型式であるグスク土器との供伴関係より、暫定的に突帯のみのグループを古段階、肥厚口縁及びツノ状突起が伴うグループを新段階として仮定。なお、瘤状突起を付する資料は、アカジャンガー式、フェンサ下層式の両土器が主体となる遺跡のいずれからも出土。東原遺跡を一つの定点として暫定的にフェンサ下層式に特徴的な文様要素とする。
- 器形は、胴上半に張りがあり、頸部で外側に強く外反させる傾向が見られるアカジャンガー式に対し、フェンサ下層式段階では、次第に胴の張り、口縁部の外反の度合いが減じ、微弱な外反を呈するようになる（ただし、フェンサ下層式では複数の器形が存在）。
- 底径は、フェンサ下層式では、広い平底底部とともに、アカジャンガー式と比較すると小型化、

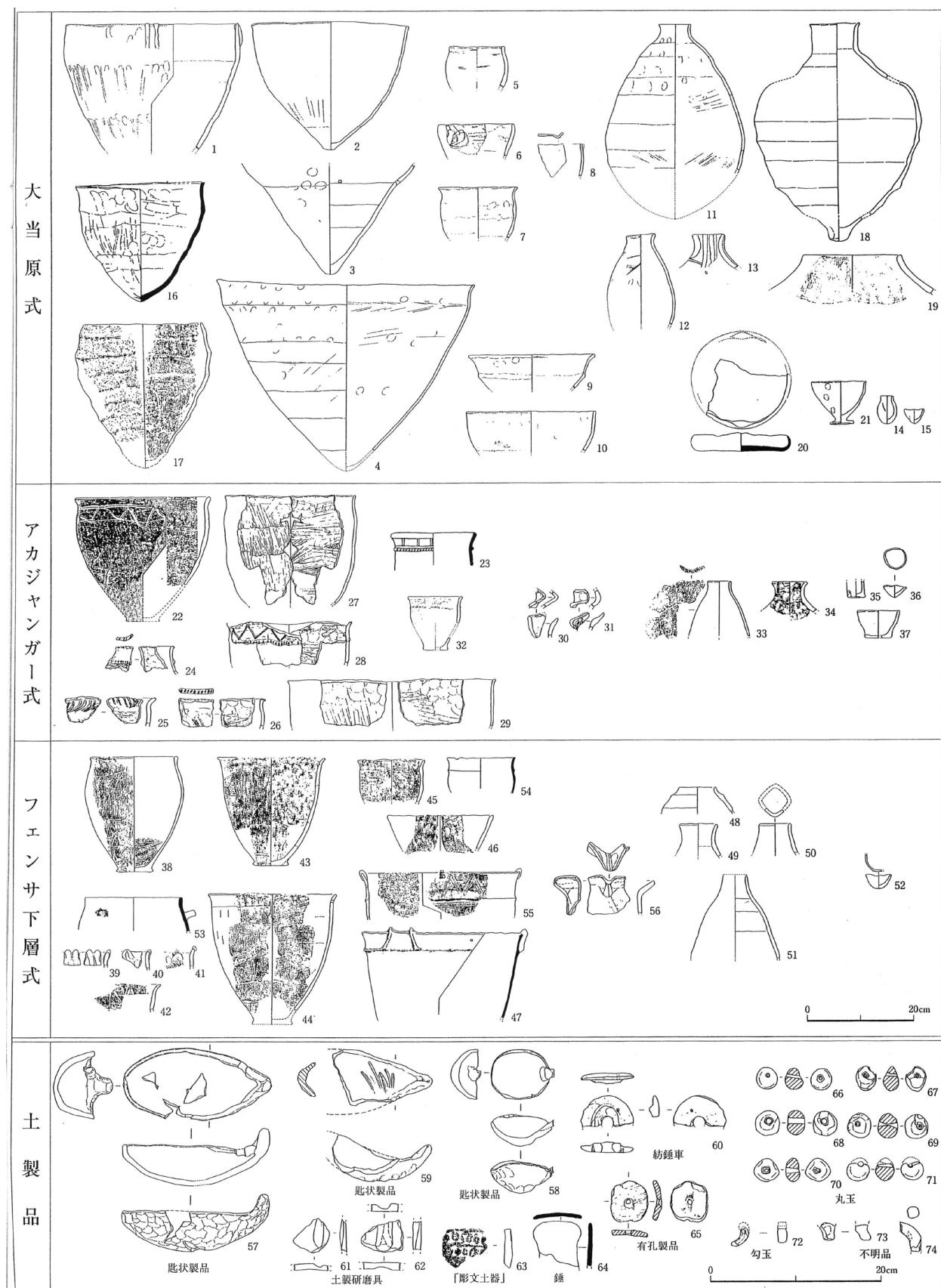


図2 沖縄諸島土器編年 貝塚後期前葉(末)～後葉(弥生後期後半～平安併行)・土製品(新里 2004)

厚底化の現象が見られる。この厚底化の現象は、定形化したくびれ平底土器が底径を減じ乳房状尖底的な形態へ型式変化するためである。また、壺の底部は不明としながらも、兼久式の壺が単純なくびれ平底形態を示さないことから、底部形態の差と器種差の相関を考慮することが今後の課題である。

以上、宮城氏の報告をまとめてみたが、アカジャンガー式・フェンサ下層式土器の研究も未だ不明な点が多い事が理解できる。しかし、兼久式土器との類似点が多く、兼久式土器の実態を明らかにするためにも、相互に比較検討を行うことが必要である。そのことにより、アカジャンガー式・フェンサ下層式土器の実体もより明らかになると考えられる。

5 遺跡の立地について

前述したが、兼久式土器の出土地は、砂丘地がほとんどである。中世以前は、農耕よりも海洋資源への依存が強いと考えられるため、海に近い砂丘地が生活地として適していたこと、島の環境から生活域が限られていたことが理由であると考えられる。兼久式土器を出土する多くの遺跡が、層位的堆積に恵まれず单一文化層を形成するのも、基本的に、兼久式土器を用いていた時期は小規模の遺跡を形成し、定住しなかった（中山 1984）と考えられるためである。また砂丘の形成は、垂直方向ではなく、海のほうに向かって形成されると考えられ、このことも層位的堆積に恵まれない理由の一つである。

奄美群島の遺跡の立地については、弥栄久志氏が長浜金久・ケジ・泉川遺跡で砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図（図3）を示し、砂丘の形成によって生活域が海側へ移動していくことを説明した（弥栄 1987）。なお、1990年に鹿児島県教育委員会が調査した『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II』でも遺跡の立地条件の類型化を試みており（長野・富田 1990）、2005年の瀬戸内町教育委員会の報告でも遺跡の立地（生活域）が、古砂丘（縄文）から新砂丘（弥生以降）へと移動することを報告している（鼎 2005）。

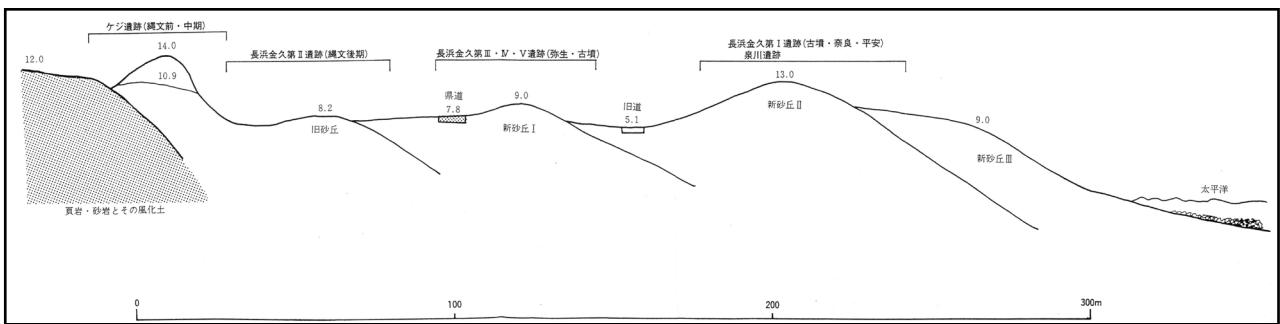


図3 砂丘形成と長浜金久遺跡群・ケジ遺跡・泉川遺跡の立地横断模式図（弥栄 1987）

沖縄編年貝塚後期土器の遺跡立地は、2000年6月に宮城氏（宮城 2000）が、2000年10月に岸本氏他がまとめている（岸本 2000）。宮城氏論文の遺跡立地をまとめてみる。

●沖縄後期の遺跡は、大半は海岸砂丘地に選地している。前半期には、海岸砂丘地（約 63%）丘陵上・台地上（10%未満）の立地。後半期では丘陵上への選地が約 25%を占めるとともに、台地上・

洞穴・沖積地への立地も10%前後となる(図4)。ただし、低島と高島などの相違があり、情報を一括して単純に述べるのには危険性がある。

- 沖縄本島内の遺跡集中地として、本島北端国頭村辺戸岬東海岸、本部半島北海岸、金武湾南の沿岸部、読谷村～北谷町の周辺、糸満市の西海岸、本島南端の東海岸の6つの地域で顕著である。
- 河川沿いに密に分布する例があり、上流域の内陸部にまで遺跡が分布している。
- 砂丘列の尾根に並行する形で貝塚及び貝塚群を形成し、層位的堆積に恵まれず单一文化層を形成する例が多い。このような発掘調査の現状は奄美地域の新砂丘遺跡においても同様である。
- 砂丘遺跡が多いのは、主な生活域が砂丘地に限られた亜熱帯地域、島嶼部の一つの特徴として捕らえることができる。
- 丘陵上及びその崖下に形成される遺跡が各地域に点在する。著名な遺跡を列記すると、勝連城南貝塚、フェンサ城貝塚などがある。後続するグスク時代遺跡とオーバーラップして選地することから、これらの土器群がグスク時代直前の土器型式として認知されている。
- 砂丘遺跡→洞穴遺跡→丘陵上遺跡への立地から見た後期遺跡の展開。
 - 後半期における遺跡の内陸部展開については、グスク時代直前の時代として捉えるなら当然の状況であろう。得に後半期において傾向が顕著になるのは前述したとおりである。按司出現の契機は8～12世紀と仮説され、この頃の農耕の可能性もある。
- 近年、那崎原遺跡では鍬跡+溝跡遺構と米・大麦・小麦・豆・タデ料などの種子遺体がセットで出土している、あわせてナガラ原東貝塚の調査で炭化米が検出されている。

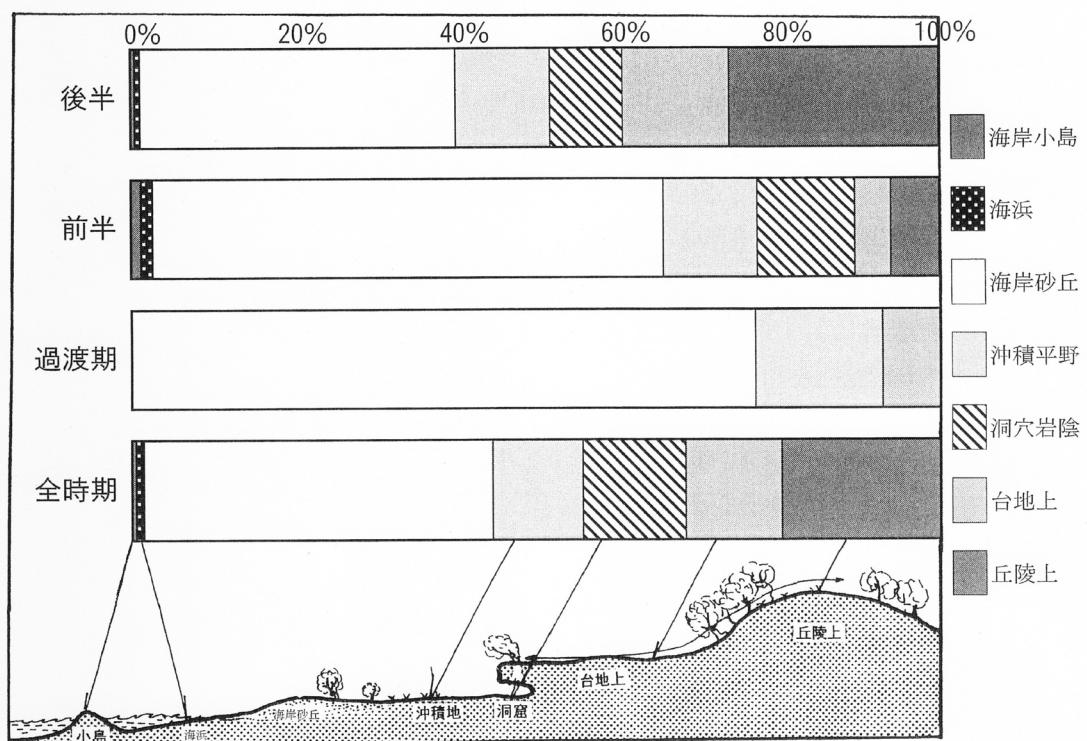


図4 沖縄後期の遺跡立地(宮城2000)

宮城氏は、各研究者や報告書をまとめ、沖縄貝塚時代後期遺跡の大半が、砂丘地に立地しているとしている。しかし、後期後半期になると内陸部への展開も見られるとしている。この内陸部への移動は、後続するグスク時代遺跡とオーバーラップして選地しており、那崎原遺跡やナガラ原東貝塚発掘調査成果より、農耕の可能性も示唆している。

遺跡の立地について、奄美群島と沖縄諸島はほぼ一致している。ただし、奄美群島の遺跡立地が山手側から海側へ移動していくのに対し、沖縄諸島では、沖縄貝塚時代後期後半期に内陸部へ移動し、グスク時代への移行や農耕の可能性も指摘されている点が注目される。低島と高島などの相違やグスク時代への移行の問題、農耕の開始の問題など、奄美群島でも今後検討が必要である。

6 揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付け

以上、兼久式土器とアカジャンガー式・フェンサ下層式土器の研究状況を先行研究の成果より概観してみた。

揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付けであるが、底部に本葉圧痕を残すことを考慮すると、兼久式土器に近似する資料であると考えられる。しかし、兼久式土器に特徴的な刻目突帯文を施す資料は少ない。このことは伊仙町川嶺辻遺跡出土土器（10世紀前後）と類似する。

川嶺辻遺跡の報告を参考にすると、宮城氏がくびれ平底系土器を下記の3段階に分けている（宮城2010）。

- くびれ平底系土器の初期型式：くびれ平底土器群は第1段階として、沈線文で文様を構成する中山氏のマツノト式、高梨氏の兼久式Ⅰ期の初期兼久式からと、大当原式の文様の影響下にあるアカジャンガー式古段階。
- くびれ平底系の典型的な型式：第2段階は、新相のアカジャンガー式が刻目突帯文を特徴とするいわゆる典型的な兼久式が並行すると目される段階。
- くびれ平底系の終焉段階の型式：第3段階として刻目突帯文が消失し、突帯文や浅い刺突文や沈線で区画文のみの文様構成となる川嶺辻に代表される土器群と沖縄の既知のフェンサ下層式の概略の段階。

宮城氏は、川嶺辻遺跡出土土器が、著しい無文化傾向が認められ、沖縄の既知の型式としてはフェンサ下層六段階（高梨氏編年の最新段階の資料）に並行すると目されるとし、前述の第3段階に位置付けられるとしている。

揚殿遺跡出土のくびれ平底土器は、小破片で器形復元可能な資料が少ない。復元可能な資料もこれまでに出土した兼久式土器と比較すると、小型の資料が多いように思われる。文様構成は、横位の連続した刺突文（区画文）に2条の縦位刺突文を施す土器が大半を占めている。この文様構成は、川嶺辻遺跡の文様構成と類似するが、施文方法において相違する。くびれ平底土器の変化の方向性が無文化方向である事を考慮すると、揚殿遺跡→川嶺辻遺跡という流れが考えられ、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器は、川嶺辻遺跡より古段階であると推定される。なお、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器は隆帯が無いことから、沈線文のみの土器群として捉えることも可能である。前述の第1段階に該当する可能性も考えられるが、揚殿遺跡の立地が砂丘地でなく内陸部赤土台地上であることを考慮すると、沖縄貝塚時代後期後半の遺跡立地と同様の立地であることが理解できる。また、共

伴する刻目突帯文を有する土器に沈線が施されていないものが大半であることも考慮すると、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器は、前述の第2段階から第3段階の頃に位置付けられ、高梨氏の土器変遷図（図1）の9世紀前後に当たる可能性が高い。

器種構成は、甕形土器と壺形土器が存在する。なお、瘤状突起を持つ土器は、復元図を確認すると壺形土器のようである。瘤状突起は、土器の周囲を完全に巡らせない（途切れる）隆帯文からの変化ではないかと考えられる。

底部であるが、くびれを持つ平底であり、小型で厚めの底部も存在する。底部の木葉痕は、くびれ平底土器のすべての資料で確認できるのでは無く、無文の底部も存在する。縄文後期土器も出土していることから、無文の底部は縄文後期土器の可能性も少くないが、揚殿遺跡のくびれ平底土器は、木葉痕を有する土器と有しない土器が存在すると考えられる。なお、木葉痕を有している資料についても木葉痕の判別が困難なものが多い。木葉痕を有する土器、有しない土器の両方を出土する遺跡の性格については、今後も検討が必要である。

遺跡の立地であるが、砂丘地では無く内陸部赤土台地上である。この遺跡立地は、これまでの兼久式土器の遺跡立地（図3）と相違する。しかし、前述した通り沖縄諸島の事例とは類似し、川嶺辻遺跡も同様の立地である。奄美群島との相違、沖縄諸島との類似は、島の環境や位置関係を考慮しなければならないが興味深い。また、沖縄諸島の研究成果では、グスク時代遺跡への展開や農耕の可能性なども指摘されていることから、揚殿遺跡の遺跡立地は奄美群島のグスク時代遺跡への展開や農耕の可能性を考える上で重要である。

出土状況であるが、発掘調査において遺構は確認されていないが、周辺に住居跡が存在する可能性は高い。また、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器は総じて小破片であり、土器の文様構成にバリエーションが少ないことを考えると短期間の使用・廃棄である可能性が高い。なお、自然遺物で貝類が出土しているが、兼久式土器に特有のヤコウガイの出土量が少ない。このことは、生活環境などが変化した可能性も考えられる。

以上、揚殿遺跡で確認されたくびれ平底土器の位置付けについて検討してみた。揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付けであるが、底部に本葉圧痕を残すことを考慮すると、兼久式土器に近似する資料であると考えられる。しかし、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器と、今までに確認されている兼久式土器において相違する点が複数存在することが確認できる。

7 兼久式土器の空間的分布について（予察）

前節までに揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付けを検討してみたが、揚殿遺跡や川嶺辻遺跡など、これまでの兼久式土器研究では兼久式土器に含まれていない資料が次々と報告されていることが確認できた。これらの土器は、兼久式土器もしくはこの系譜に帰する資料であると考えられるが、アカジヤンガ一式土器・フェンサ下層式土器に類似する点も少なくなく、伊藤慎二氏が指摘する、「兼久式土器・アカジヤンガ一式土器・フェンサ下層式土器は明確に一線を区別することが困難である」としている点や「くびれ平底系土器様式」として総括（伊藤2000）している点も理解できる。よって、兼久式土器の空間的分布を線引きする事は困難であるが、兼久式土器の特徴であるくびれ平底底部の木葉圧痕や刻目隆帯文を有する土器群は、奄美群島の北部を中心に分布していることは事実である。そこで、この特徴を基に兼久式土器の空間的分布を検討してみたい。

くびれ平底系土器様式の分布は、北限が喜界島（トカラ列島への分布は不明）であり、南限は沖縄諸島の久米島であると考えられる。その分布域の中で、兼久式土器は奄美大島を中心に奄美群島（与論島は不明）に分布し、アカジヤンガー式・フェンサ下層式土器は沖縄諸島に分布している。奄美群島において、兼久式土器の前段階にあたる古墳時代並行期の土器は、スセン當式土器が推測されており、アカジヤンガー式土器の前段階の土器は大当原式土器が考えられている。つまり、くびれ平底系土器様式の前段階（古墳時代並行期）では、奄美群島と沖縄諸島では相違する土器文化圏が存在したと考えられ、くびれ平底系土器様式の時期に同じ土器文化圏に含まれたと考えられる。このような両者の疎遠性・近似性の関係は、各時代によってたびたび見られるが、何故この時期に同一土器文化圏になったのかは今後の課題である。

くびれ平底系土器様式は6～10世紀頃、奄美群島・沖縄諸島に分布していたと考えられる。そして、沖縄諸島の研究成果から大きく二時期に別けることが可能であり、その前後で各土器型式の分布域が微妙に変化している可能性がある。そこで、ここではくびれ平底系土器様式の空間的分布の中で兼久式土器がどのように分布しているのか予察してみたい。

くびれ平底系土器様式前期（6～8世紀頃）の兼久式土器の分布

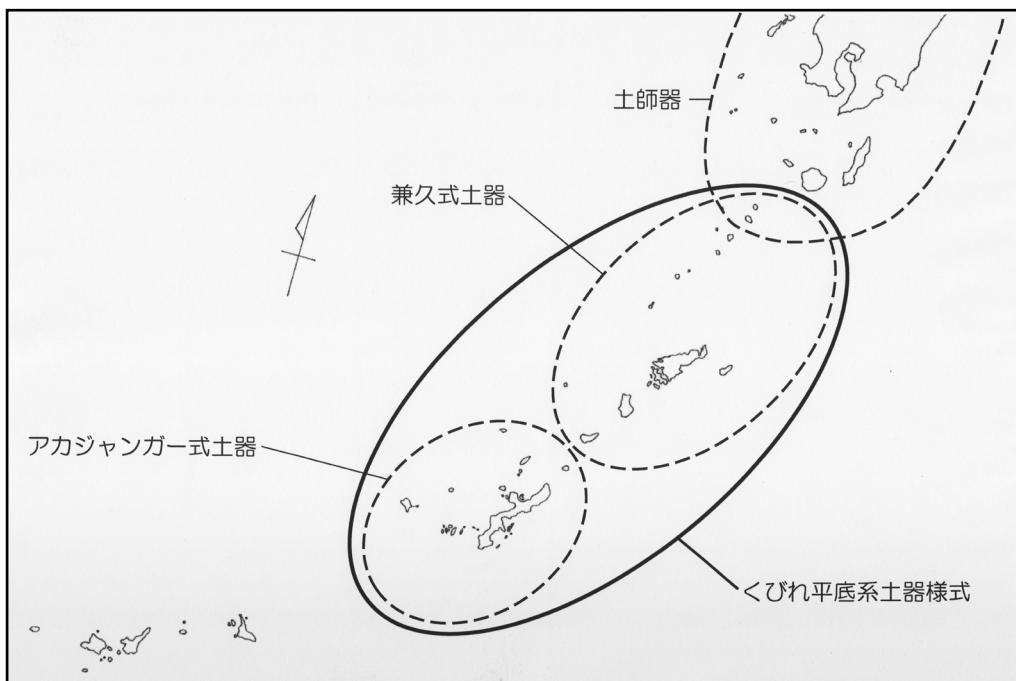


図5 6～8世紀頃の兼久式土器の分布（新里 2004 を基に作成）

6～8世紀頃の兼久式土器分布は、図5に示す範囲に分布していたと推測される。現在の所、トカラ列島や与論島での分布については不明であるが、概ね奄美群島全域に広がっていたと考えられる。当該時期は、用見崎遺跡やマツノト遺跡、小湊フワガネク遺跡群など兼久式土器が出土する代表的な遺跡が多い時期である。また、これらの遺跡はヤコウガイ大量出土遺跡としても注目されている。しかし、分布域南部にあたる沖永良部島では、奄美大島北部と比較して兼久式土器の出土例が非常に少ない。このことは、沖永良部島においてスセン當式土器が発見されていること（前段階に人々が生活している）や、砂丘において神野貝塚などの遺跡が確認されている（兼久式土器が多

く出土する砂丘遺跡の調査事例が皆無ではない）ことを考慮すると少なすぎると感じる。

沖縄諸島での分布状況は、アカジャヤンガー式土器が分布していることが確認できる。アカジャヤンガ式土器は、兼久式土器と近似性の高い土器であるが、すべての遺跡でヤコウガイが大量に出土するわけではないようである。

以上、当該時期のくびれ平底系土器の分布は、奄美群島と沖縄諸島に類似性の高い土器が分布していることが確認できるが、両者の中間に位置する沖永良部島、与論島での出土状況及び遺物の確認状況は少なく、境界域の状況は判然としていない。また、くびれ平底系土器様式全体を概観する

くびれ平底系土器様式後期（9～10世紀頃）の兼久式土器の分布

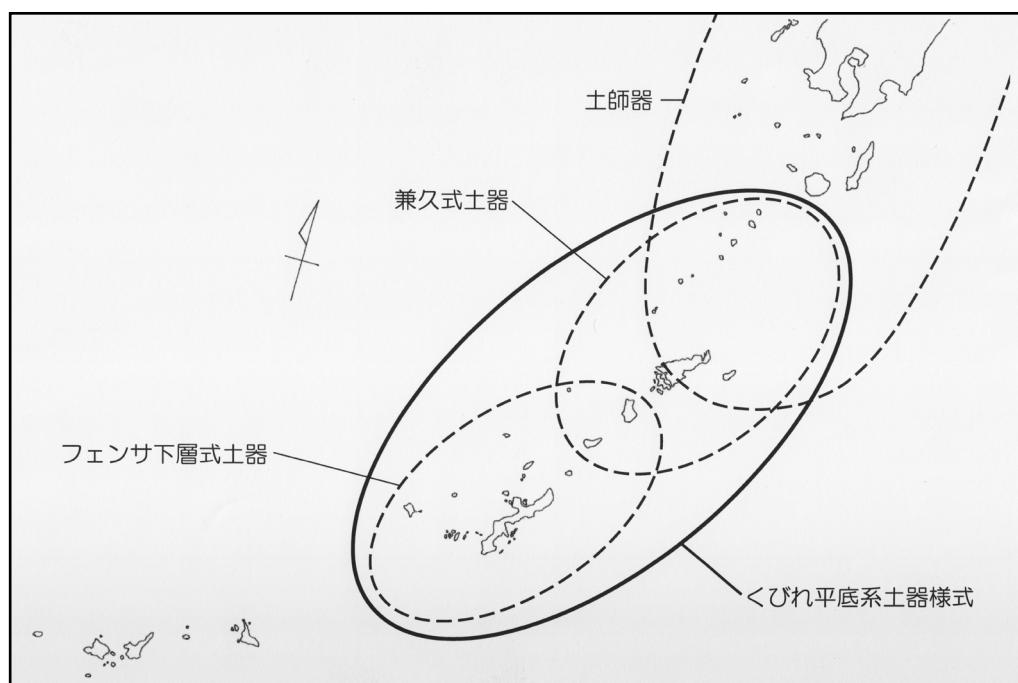


図6 9～10世紀頃の兼久式土器の分布（新里2004を基に作成）

と、奄美大島北部で見られるようなヤコウガイの集積がすべての遺跡で確認されるわけではないことも確認できる。

9～10世紀頃の兼久式土器の分布は、図6に示す範囲に分布していると推測される。6～8世紀頃と同様にトカラ列島及び与論島については、現在の所不明な点が多い。しかし、沖永良部島での状況は変化しており、揚殿遺跡や阿茂留B遺跡など兼久式土器もしくはこの系譜に帰する資料を出土する遺跡が確認されつつある。これらの土器群は、徳之島の川嶺辻遺跡でも確認されているが、調査事例の多い奄美大島北部では殆ど確認されておらず、当該時期の奄美群島南部を中心に分布する土器型式である可能性が高い。

遺跡の立地についても、奄美群島北部では海岸に隣接する砂丘上で遺跡が確認されるが、奄美群島南部では少し内陸部の赤土丘陵上で確認される傾向が見受けられる。このような内陸部への移動傾向は、当該時期の沖縄諸島においても同様の傾向が見られ、沖縄諸島の研究成果では遺跡立地の変化理由としてグスク時代遺跡への展開や農耕の可能性などが指摘されている。しかし、兼久式土器研究では、これらの可能性は指摘されていない。なお、これら赤土丘陵上の遺跡からは、奄美群

島北部の兼久式土器出土遺跡と比較するとヤコウガイの出土量が非常に少ない。しかし、他の貝類の出土は認められることから土壤的な問題でヤコウガイの出土例が少ないので無く、ヤコウガイ大量出土遺跡のように意図的にヤコウガイを捕獲する生活を営んでいない可能性がある。このことは、沖縄諸島において多くの遺跡において同様の傾向が見られるようである。

では、奄美群島南部で確認されるこれらの土器型式が、沖縄諸島のフェンサ下層式土器に含まれる型式であるかというとそうとも言い切れず、図2のフェンサ下層式土器の欄を概観してみてもこれらの土器型式が一般的なフェンサ下層式土器ではないことが確認できる。

揚殿遺跡等で確認された土器型式は、底部に本葉圧痕を残す資料が存在することを考慮すると、兼久式土器に近似する資料であると考えられる。しかし、今までに確認されている兼久式土器と比較すると相違する点が複数存在することが確認できる。また、フェンサ下層式土器とも類似する点が存在するが、相違する点も複数確認できる。これら、奄美群島南部を中心とする土器型式は、当該時期のくびれ平底系土器様式を理解する上で重要な資料であると考えられ、今後も検討が必要である。

奄美大島北部における状況は、土師器若しくは土師器模倣土器が増加している事が確認でき、北方からの影響がより強まった事を示していると推測できる。このことについても今後の検討課題である。

9～10世紀頃の兼久式土器の分布範囲は、前期の分布範囲と比較して大きな変化は確認できない。ただし、兼久式土器が分布している奄美群島では、北部と南部にそれぞれ違う型式の土器が存在し、遺跡立地や生活環境が相違する人々が生活していた可能性がある。これらの可能性は、予察の域を出ないが、今後の資料増加を待ち検討していく必要がある。

おわりに

以上、兼久式土器の空間的分布について予察を行ってみたが、沖縄諸島の研究と同様に二期に大分できる可能性が見えてきた。そして、おぼろげではあるがその前後において奄美群島北部と南部において相違点が確認でき、沖縄諸島との関連も僅かではあるが確認することができた。

これまでの兼久式土器研究は、奄美群島北部の遺物を中心に行われてきた。それは、発掘調査事例が奄美群島北部に集中していた事が原因であり、揚殿遺跡等で確認される土器群が殆ど確認されなかった事に起因する。よって、これまでの兼久式土器の編年研究では、揚殿遺跡及び川嶺辻遺跡で出土する土器群は含まれていない。また、遺跡の立地についても奄美群島北部と南部では相違することが考えられ、兼久式土器後半（フェンサ下層式土器並行期）では、奄美群島北部と南部の人々を取り巻く環境が相違している可能性が考えられる。これは、奄美群島北部に土師器が集中することとも無関係では無いと推測され、今後の検討課題である。

今回、揚殿遺跡出土のくびれ平底土器を実見・位置付けの検討を行う貴重な機会をいただいた。揚殿遺跡出土の発掘調査資料は、小破片であり遺構も確認されて無いが、今後の兼久式土器、アカジヤンガー式土器、フェンサ下層式土器、いわゆるくびれ平底系様式研究に大きく寄与する資料であると考えられる。

謝辞

本稿は、知名町教育委員会刊行『揚殿遺跡』第5章第1節「揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付け」に加筆・修正を加えたものである。

引用・参考文献

- 池畠耕一 1984 『あやまる第2貝塚－笠利町文化財報告No.7－』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 伊藤慎二 2000 『琉球縄文文化の基礎的研究』
- 牛ノ浜修・堂込秀人 1983 『面縄第1. 第2貝塚』鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会
- 内山省吾 1983 『コピロ遺跡－研究室活動報告15－』熊本大学文学部考古学研究室
- 大西智和 1997 「奄美諸島における兼久式土器分類のための基礎作業」『南日本文化』第30号
鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
- 小倉卓 1997 『用見崎遺跡IV－研究活動報告33－』熊本大学文学部考古学研究室－
- 小畠弘己・辻満久 1981 『宇宿港遺跡－研究室活動報告－10』
- 鼎丈太郎 2001 「奄美における兼久式土器の基礎的研究～小湊・フワガネク（外金久）遺跡を中心
(2008) に～」
『瀬戸内町立図書館・郷土館紀要』第3号 瀬戸内町立図書館・郷土館※平成13年
(2001) 琉球大学修士論文
- 鼎丈太郎 2010 「奄美における兼久式土器の基礎的研究2」『瀬戸内町立図書館・郷土館紀要』
第5号瀬戸内町立図書館・郷土館
- 鼎丈太郎 2011 「揚殿遺跡出土のくびれ平底土器の位置付け」『揚殿遺跡』知名町教育委員会
- 河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の編年について」『琉大史学』琉球大学史学会
- 河口貞徳 1978 『サウチ遺跡』笠利町教育委員会
- 河口貞徳 1996 「兼久式土器」『日本土器事典』
- 岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2000 「沖縄編年後期の土器様相について」『高宮廣衛先生
古希記念論集』
- 木下尚子 2003 『先史琉球の生業と交易 改訂版』熊本大学文学部
- 木下尚子 2006 『先史琉球の生業と交易 2』熊本大学文学部
- 新里亮人 2010 『川嶺辻遺跡』伊仙町教育委員会
- 高梨修 1993 「琉球弧・奄美諸島におけるいわゆる「兼久式土器」研究の基礎の方針」
『法政考古学』第20集記念論集
- 高梨修 1995 『シンポジウムよみがえる古代の奄美』「マツノト遺跡出土の土器と編年」
シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会
- 高梨修 1998 「名瀬市小湊・フワガネク（外金久）遺跡の発掘調査」『鹿児島県考古学会研究発表
資料－平成10年度－』
- 高梨修 1999a 『第2回奄美博物館シンポジウムサンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流－ヤコウガイ
をめぐる考古学・歴史学－』名瀬市教育委員会
- 高梨修 1999b 『奄美大島名瀬市 小湊・フワガネク（外金久）遺跡－学校法人日章学園「奄美看護
福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査概報－』名瀬市教育委員会

- 高梨修 2000a 「ヤコウガイ交易の考古学－奈良～平安時代並行期の奄美諸島、沖縄諸島における島嶼社会－」
『交流の考古学』朝倉書店
- 高梨修 2000 b 「いわゆる兼久式土器と土盛マツノト遺跡出土土器の比較検討」
『奄美博物館研究紀要』第5号名瀬市立奄美博物館
- 高梨修 2004 「奄美諸島の土器」『考古資料大観』第12巻小学館
- 高梨修 2005a 「小湊フワガネク遺跡群第一次・第二次調査出土土器の分類と編年」
『小湊フワガネク遺跡群 I』名瀬市教育委員会
- 高梨修 2005b 「第二章 兼久式土器の分類と編年」『ヤコウガイの考古学』同成社
- 高梨修 2007 「南島の歴史的段階 - 兼久式土器出土遺跡の再検討 - 」『東アジアの古代文化』
- 高宮廣衛 1990 『先史古代の沖縄』
- 立神次郎 1986 『泉川遺跡－新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書－』鹿児島県教育委員会
- 戸崎勝洋・長野真一 1987 『先山遺跡』鹿児島県大島郡喜界町教育委員会
- 長野真一・富田逸郎 1990 「第5節 まとめ」『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II』鹿児島県教育委員会
- 中村友昭 2006 「奄美諸島の古墳時代併行期の土器」『先史琉球の生業と交易2』熊本大学文学部
- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子・上村俊雄 1996 「奄美地域における弥生土器の型式学的検討」
『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第44号別冊』
- 中山清美 1979 『手広遺跡 発掘調査終了報告－龍郷町教育委員会
- 中山清美 1983 「兼久式土器（I）」『南島考古』8号
- 中山清美 1984 「兼久式土器（II）」『南島考古』9号
- 中山清美 1988a 『下山田II遺跡（東地区）』鹿児島県大島郡笠利町教育委員会
- 中山清美 1988b 「第四章 考古学上からみた龍郷町」『龍郷町誌 歴史編』龍郷町誌歴史編纂委員会
- 中山清美 1992a 「奄美における貝符と兼久式土器」『奄美学術調査記念論文集』
南日本文化研究所叢書18、鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
- 中山清美 1992b 『マツノト遺跡発掘調査概報』笠利町教育委員会
- 中山清美 1995a 『シンポジウムよみがえる古代の奄美「マツノト遺跡の発掘調査」』
シンポジウムよみがえる古代の奄美実行委員会
- 中山清美 1995b 『用見崎遺跡－長島植物園開発に伴う遺跡確認調査－』笠利町教育委員会
- 中山清美 1996 「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』－第4号－奄美考古学会
- 中山清美 2000 「奄美考古学研究の現状」『古代文化』第52巻 第3号、古代学協会
- 中山清美 2005 『安良川遺跡』笠利町教育委員会
- 中山清美 2006a 『マツノト遺跡』笠利町教育委員会
- 中山清美 2006b 「兼久式土器分類試論 - 奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に - 」
『先史琉球の生業と交易2』熊本大学文学部
- 中山清美 2008 「マツノト遺跡における兼久式土器の編年基準」『南島考古』第27号

- 名島弥生・安斎英介・宮城弘樹 2008 「南西諸島の炭素14年代資料の集成」『南島考古』第27号
- 西園勝彦 2009 『屋鈍遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 藤江望 1996 『用見崎遺跡II－研究活動報告32－』熊本大学文学部考古学研究室
- 松原明美 1983 『辺留窪遺跡－研究室活動報告15－』熊本大学文学部考古学研究室
- 美浦雄二 1995 『用見崎遺跡－研究活動報告31－』熊本大学文学部考古学研究室
- 森田太樹 2011 『揚殿遺跡』知名町教育委員会
- 弥栄久志 1984 『長浜金久遺跡－新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報－』鹿児島県教育委員会
- 弥栄久志 1987 『長浜金久遺跡（第III・IV・V遺跡）』鹿児島県教育委員会
- 弥栄久志 1995 『長浜金久遺跡－新奄美空港に伴う埋蔵文化財報告書－』鹿児島県教育委員会
- 宮城弘樹 2000 「貝塚時代後期土器の研究（II）－後期遺跡の集成－」『南島考古』第19号
- 宮城弘樹 2010 「目手久川嶺辻遺跡第5遺構面出土土器の位置付け」『川嶺辻遺跡』